

接続表現の欠如からみるテキストの結束性
フランス語と日本語の対照研究

高 垣 由 美

Journal of Language and Culture
Language and Information
Vol. 5 (2010)
Department of Language and Culture
School of Humanities and Social Sciences
Osaka Prefecture University

言語文化学研究（言語情報編）
2010・3 第5号抜刷
大阪府立大学人間社会学部 言語文化学科

接続表現の欠如からみるテキストの結束性

—フランス語と日本語の対照研究—*

高 垣 由 美

1. はじめに

テキストの解釈は、一般に首尾一貫性という原則によって支配されている。つまり2つの文が連続して並んでいる場合、読み手は通常、その2つの文が意味の上でなんらかの関係を持つと想定する。この関係は、暗黙のままということもあるが、接続詞や副詞といった様々な接続表現によって示されることが多い。フランス語のテキストでは、日本語よりも、このような文と文をつなぐ接続表現の使用頻度が高いようである。この傾向を示す例(1)は、日本語の新聞記事とそのフランス語訳である。(以下のすべての例で、[ø]は接続表現が存在しないことを示す。また、ボールド体、下線、文字の囲みは、筆者によるものである。)

(1) a. 日本語原文

彼は、華々しく、かつ矛盾に満ちた政治家、と評された。賛辞もふんだんにあったが、あらゆる批判も浴びせられた。[ø]「人生のはかなさ」も知った。

(1996年1月10日朝日新聞)

b. フランス語訳

Ce dernier s'est fait une réputation d'homme politique à la fois éblouissant et rempli de contradictions. Il fut adulé autant que critiqué. Il a **finale**ment découvert « la fragilité de la vie ».

(Corpus B, p. 80)

* 本研究は、財団法人三菱財団の平成18年度人文科学研究助成を受けてフランス語で執筆された博士論文Takagaki (2008)の内容の一部を日本語にし、さらに科研費(21520446)の助成を受けて全面的に加筆修正したものである。

フランス語訳で囲みになっている *finalement* (ついに, 結局) に対応する要素は, 日本語原文には存在しない。この *finalement* は, 翻訳者が付け加えたものである。実際, フランス語ではこの語がなければ, 文と文の間のつながりがやや唐突で, なんとなく座りが悪い感じがする。この加筆によって, 原文が言外の含みにとどめている文と文の間の論理的関係が明らかにされている。このように, 日本語では単に文を並置するだけの場合でも, フランス語ではなんらかの接続表現を入れるほうが望ましい例がしばしば見られる。

フランス語は, 接続表現の多用によってテキスト内部のつながりを明らかにすることを好むのに対し, 日本語では綿密に練り上げられたテキストでも, 各部分の関係づけは明示せず, 読み手に文と文との間を埋めることを求めるようである²。この傾向が確かに存在するかどうかを, 実際にテキストの中で検証し, 日本語とフランス語のテキストの結束性の違いを明らかにする。日本語とフランス語の原文とその翻訳を比較し, ゼロ接続つまり2つの文が接続表現なしに並置されている場合を調べる³。原文にはない接続表現が翻訳に挿入されている場合, それは翻訳者が原文の意味をより明確に示すべきと考えたからであろう。この操作は, 2つの言語の間の微妙な差異を明らかにする。

フランス語と日本語の対照研究では, 個別の現象から出発してボトムアップ的にテキストを研究する方法が通常行われている。しかし本稿では, 接続表現の細かな意味の違いはあえて捨象するトップダウン的方法を採用することで, フランス語と日本語の結束性の違いを明らかにしてゆく。さまざまな接続表現をマクロの視点から考察することで, 二言語間のテキストの違いに関する大きな傾向をとらえることをめざす。

² 翻訳の分野では, Vinay & Darbelnet (1977 : 222) が, 英語とフランス語の間で同様の傾向を報告し, フランス語のほうが明示的表現を好むとしている。

³ ゼロ接続に関する研究としては, Clark (1977), Bar-Lev & Palacas (1980), Lascarides & Oberlander (1993), Carston (1993) がある。ゼロ接続の分類と接続一般については Payne (1985) がある。結束性はゼロだが, 一貫性のあるテキストについての多数の例があるのは, Brown & Yule (1983) である。

2. 資料

資料として使用したのは、和文仏訳、仏文和訳、翻訳といった教育目的で書かれた9冊の対訳本である。(資料の出典は論文末に記す。)資料A, 資料B, 資料C, 資料D, 資料Eでは、フランス語原文に日本語の対訳が、資料a, 資料b, 資料c, 資料dでは、日本語原文にフランス語の対訳が付されている。原文、翻訳、語彙説明、解説を含めて資料全体で約1200ページの分量になる。取り上げたテキストはすべて新聞や雑誌の記事である。

このような資料を選んだのには、理由がある。2言語間の比較を行うには、翻訳がかなりの程度原文に忠実でなければならない。訳された文の構造が、原文とかけ離れていれば、2言語間で対応する表現を見いだすのが難しくなるからである。その点、言語習得という目的でなされた翻訳はかなり原文に忠実である。また新聞・雑誌の記事の翻訳は、文学作品などと比べて技巧を凝らした意訳が出てくる可能性が低い。このため、フランス語の接続表現に対応する日本語の表現(あるいはその逆)を同定するのは、比較的容易である。

3. 基本概念

3.1. 「文連結接続表現」の定義

接続表現の数を正確にとらえるためには、その対象を明確にしなければならない。本稿で目指している結束性に関する2言語の対照研究のためには、接続表現をかなり広く定義する必要があるが、そうすると文法的な定義は不可能になる。文と文をつなぐ接続表現つまり「文連結接続表現」には、以下のような様々な文法範疇に属する表現が入る。

接続詞：*et* (そして), *mais* (しかし), *car* (なぜならば), *donc* (ゆえに) ...

副詞：*ainsi* (このように), *d'abord* (まず), *puis* (それから) ...

副詞句：*en effet* (実際), *en fait* (実は), *en revanche* (逆に) ...

成句：*c'est ainsi que* (こういうわけで) ...

「文連結接続表現」を「文頭にあり、文を前の文脈に結びつけるしるし」、
「文」を以下の句点で区切られた単位と定義する。

フランス語 . ? ! ; :
日本語 。 ? !

ただしフランス語の幾つかの接続表現の性質を考えると、この視覚的な定義に若干の修正が必要となる。フランス語の文連結接続表現のほとんどは、文頭に置かれる。ところが、*donc*（それゆえに）、*cependant*（しかし）、*pourtant*（しかし）、*toutefois*（しかし）のように文頭から移動しうる接続表現もある。これらの接続表現は、(2)の *cependant* のように、文中に挿入することが可能である。

(2) a. フランス語原文

« Voilà deux pas de géant vers la paix et la sécurité », pouvait dire un Bill Clinton visiblement satisfait à l'issue de la journée de lundi. Le président américain et les quinze autres dirigeants réunis à Bruxelles n'osaient, **cependant**, faire preuve du moindre triomphalisme.

(*Le Monde*, 1994年1月12日(水); 資料 b, p. 113)

b. 日本語訳

10日の首脳会議一日目を終えてビル・クリントン米大統領は満足げに「これは平和と安全への大きな2つの歩みだ」ということができた。しかし、同大統領を含めてブリュッセル首脳会議参加の16全首脳は少しも勝ち誇った態度を見せる気持ちにはなれなかった。

(*Ibid.* p. 114)

第2文は、その論理的意味を変えることなく *cependant* を文頭に移動させ *Cependant, le président américain et les quinze autres dirigeants réunis à Bruxelles n'osaient faire preuve du moindre triomphalisme.* とパラフレーズすることが可能である。以下の分析では、もし同様のパラフレーズが可能ならば、その接続表現はたとえ文頭になくとも、文連結接続表現とみなすことにする。

3.2. 2種類の接続表現

日本語の伝統文法では、接続詞と接続助詞の2種類の接続表現を区別する。接続詞は文頭に置かれる。これに対し接続助詞は、節の終わりに付き、ほとんどの場合その後他の節が続く。われわれの分析では、接続詞は文連結接続表現になりうるが、接続助詞はそうではない。よって(3)の接続詞「しかし」は文連結接続表現だが、(4)の接続助詞「のに」はそうではない。

(3) 医師たちはあらゆる手をつくした。しかし、被害者は助からなかった。

(4) 医師たちはあらゆる手をつくしたのに、被害者は助からなかった。

同様にフランス語に関しては、伝統的に従位接続詞と分類されている要素は文連結接続表現から除かれる。(3)の例に対応するフランス語の(5)の *Toutefois* (しかし) は、文連結接続表現であるが、(4)の例に対応する(6)の *Quoique* (のに) はそうではない。なぜならば、*Quoique* がそれに続く *les médecins aient tout tenté* (医師たちはあらゆる手をつくした) という節を意味的に結びつけているのは、前の文脈ではなく、後続する節 *la victime n'a pas survécu* (被害者は助からなかった) だからである。

(5) Les médecins ont tout tenté. **Toutefois**, la victime n'a pas survécu.
 医師たち AUX⁴ すべて 試みる。しかし 被害者 AUX NEG 生き残る
 ‘医師たちはあらゆる手をつくした。しかし、被害者は助からなかった。’

(6) **Quoique** les médecins aient tout tenté, la victime n'a pas survécu.
 のに 医師たち AUX すべて 試みる 被害者 AUX NEG 生き残る
 ‘医師たちはあらゆる手をつくしたのに、被害者は助からなかった。’

文連結接続表現の中には、文と文をつなぐだけでなく1つの文の内部の要素(節, 句, 語)同士をつなぐことができるものもある。この

⁴ 本稿で使用されている略号は以下の通りAUX = 助動詞, NEG = 否定, COP = コピュラ

ため同じ表現が、ある場合には文連結接続表現となり、別の場合にはそうならないことがある。「が」を例としてみよう。

- (7) a. 兄は頭がいい。が、知能指数が高いわけではない。
 b. 兄は頭がいいが、知能指数が高いわけではない。

(7a)の「が」は接続詞で、(7b)の「が」は接続助詞である。われわれの定義では、(7a)の場合だけが文連結接続表現で、(7b)の文はそうではない。なぜならば、(7b)では「が」は文より下のレベルの要素同士を結びつけているからである。

フランス語についても同様である。(8a)は(7a)に、そして(8bcd)は(7b)に対応する。

- (8) a . Mon frère est intelligent. **Mais** il n'est pas surdoué.
 私の 兄 COP 頭がいい。 が 彼 COP NEG 知能指数が高い。
 b . Mon frère est intelligent, **mais** il n'est pas surdoué.
 私の 兄 COP 頭がいい, が 彼 COP NEG 知能指数が高い。
 c . Mon frère est intelligent, **mais** n'est pas surdoué.
 私の 兄 COP 頭がいい, が COP NEG 知能指数が高い。
 d . Mon frère est intelligent, **mais** pas surdoué.
 私の 兄 COP 頭がいい, が NEG 知能指数が高い。

この4つの例の中で、われわれの定義では(8a)の *Mais* だけが文連結接続表現であり、(8bcd)の *mais* はそうではない。なぜならば(8bcd)では、*mais* は文より下のレベルの要素を結びつけているからである。

4. 分析方法

4.1. 生起数

前節の文連結接続表現の概念に従って、資料の対訳本の中での生起数を数える。「フランス語と日本語の両方で生起」「フランス語でだけ生起」「日本語でだけ生起」の3つの場合が考えられる。

分析は「フランス語 日本語」と「日本語 フランス語」のように両方向から調べる。以下のように2段階で行う。

- 1) フランス語で文と文を繋ぐ文連結接続表現を見つけたとき、日本語テキストでそれに対応する明示された表現(必ずしも文連結接続表現である必要はない)があるかを調べる。対応する表現があれば、この場合を「フランス語と日本語の両方で生起」に分類する。対応する表現がなければ、この場合を「フランス語でだけ生起」に分類する。
- 2) 次に日本語テキスト中でフランス語にない文連結接続表現がないかを調べる。対応する表現(必ずしも文連結接続表現である必要はない)があれば、この場合を「フランス語と日本語の両方で生起」に分類する。対応する表現がなければ、この場合を「日本語でだけ生起」に分類する。

言い換えると、「フランス語でだけ生起」は日本語で文と文が接続表現なしに並置されていることを意味し、「日本語でだけ生起」はフランス語のゼロ接続を意味する。

上記の方法による分析の例を以下に示す。

(9) a. フランス語原文

Kim Il-sung sera-t-il encore plus encombrant mort que vivant ? Aux yeux de son peuple, soumis à une propagande officielle débilite, le dictateur nord-coréen, décédé vendredi 8 juillet à l'âge de 82 ans, devait évoquer une sorte de demiurge. [Ø] Pour le reste du monde, l'homme était d'autant plus dangereux qu'il disposait, peut-être, de l'arme nucléaire. Kim Il-sung laisse, en principe, le pouvoir entre les mains de son fils, Kim Jong-il. De cet héritier de 52 ans on ne sait presque rien : la Corée du Nord est l'un des pays les plus fermés, les plus

secrets. **De nouveau**, le reste de la planète a peur. Vu de Pyongyang, la capitale, c'est là un formidable exploit. Près de cinquante ans après que Staline eut installé Kim Il-sung aux commandes, voici la communauté internationale inquiète à cause des risques d'instabilité en Asie.

La Corée du Nord, c'est quoi ? Un pays dont les habitants sont encouragés compte tenu du désastre économique, à sauter un repas par jour. Un nain à l'ombre du géant économique sud-coréen, le frère ennemi, allié des Etats-Unis. Un régime isolé, toujours soutenu pourtant par la Chine, mais pour combien de temps encore ? **Et pourtant**, c'est bien Pyongyang qui parut déstabiliser Washington, ces dernières semaines : non seulement les Nord-Coréens pourraient être en possession d'un ou deux engins nucléaires, mais ils donnent clairement l'impression qu'ils n'hésiteraient pas à s'en servir. Depuis des mois, les Etats-Unis ont engagé un bras de fer avec la Corée du Nord afin que cette dernière autorise le contrôle de plusieurs installations par les inspecteurs de l'Agence internationale de l'énergie atomique. Le chantage nucléaire commençait à payer : [Ø] Kim Il-sung est mort le jour même où s'ouvraient des négociations de haut niveau entre Pyongyang et Washington : et dix-sept jours avant le sommet historique reporté pour cause de décès — avec la Corée du Sud.

(*l'Express*, 1994年7月21日; 資料 b, pp. 79-80)

b. 日本語訳

金日成主席は生存中よりも死んでなお一層の厄介ものになるのだろうか。北朝鮮国民は思考力をなくさせる公式プロパガンダに曝されて、7月8日金曜日に82歳で死去した北朝鮮の独裁者、金日成を一種の神様とも思っていたに違いない。[しかし]北朝鮮以外の世界の人々にとっては、金日成は多分、核兵器を持っていたと思われるだけに危険な人物だった。金日成は予想外のことがない限り、権力を子息の金正日の手に残している。この52歳の後継ぎの金正日については、ほとんど何も知られていない。北朝鮮はこのうえなく閉鎖的な、秘密にみちた国のひとつだ。またしても、世界は恐れをいだいている。これは首都平壤にしてみれば、すばらしい快拳といえる。スターリンが金正日を指導者に据えて以来50年近く経つのに、いまでも国際社会はアジア情勢が不安定化する危険に脅えているのだから。

北朝鮮とはどんな国なのか。破滅的な経済状態のために、国民が毎日1食減らすことの奨励されている国である。憎み合う兄弟国の韓国は米国の同盟国で経済大国になったが、北朝鮮はこの経済大国の陰にある小国である。孤立した体制で、常に中国の支援を受けてきたが、今後まだどれだけの間、この支援をうけられるのだろうか。それでも、過去数週間、この北朝鮮の方が米国を揺さぶっているように見えた。北朝鮮は1, 2個の核爆

弾を持っているかも知れないというだけでなく、場合によってはそれを使うことも厭わないという印象をはっきり与えている。数ヶ月前から、米国は北朝鮮と根比べをしてきた。北朝鮮が国際原子力機関査察官による同国内の数力所の施設チェックを認めるようにするためである。こうした中で北朝鮮による核の脅しは米国に協議再開を決意させたほか南北首脳会談も決め成果をあげ始めていた。しかし第3ラウンド米朝高官協議が始まった日に、金日成が亡くなった。これは歴史的な韓国との首脳会談の17日前でもあった。首脳会談はこの金死去のため延期された。

(Ibid. pp. 81-82)

フランス語原文 日本語訳

- 1) (9a)には、*de nouveau* (第1段落下線部)と、*et pourtant* (第2段落下線部)の2つの文連結接続表現がある。
- 2) これら2つの文連結接続表現には、(9b)の日本語訳の中で、それぞれ対応する表現「またしても」と「それでも」がある。
- 3) *de nouveau* と *et pourtant* の場合はともに「フランス語と日本語の両方で生起」に分類される。

日本語訳 フランス語原文

- 4) (9b)には、1)で現れた対応する表現を除き、日本語訳は最初と最後の段落に2つの文連結接続表現「しかし」がある。
- 5) フランス語原文では、第3文(*Pour le reste du monde...*)と最後から2つ目の文(*Kim Il-sung est mort...*)は、文連結接続表現を持たない。「しかし」のような反意的意味を表す他の表現も存在しない。
- 6) この「しかし」の場合は2つとも、「日本語でだけ生起」に分類される。

4.2. 「対応する表現」の同定

ここで文連結接続表現に「対応する表現」を定義しよう。(9a)の *de nouveau* と「またしても」や、*et pourtant* と「それでも」のように、文連結接続表現同士が対応するのならば、同定は難しくない。しかし(10a)の

ように、参照するテキストに文連結接続表現がない場合がある。

(10) a. フランス語原文

En 1981, M. Chirac était entré en lice quatre-vingt-deux jours avant le premier tour, où il avait obtenu 17,99% des suffrages exprimés et, en 1988, premier ministre en poste, il s'était présenté quatre-vingt-dix-huit jours avant l'échéance à l'occasion de laquelle il avait recueilli, cette fois, 19,94% des voix.

(*Le Monde*, 1994年11月5日(土); 資料 b, p. 157)

b. 日本語訳

1981年にはシラクは第1回投票の82日前に大統領選の戦いに入った。そしてこの第1回投票で有効投票の17.99%を得た。1988年には現役首相だったが、投票日の98日前に立候補を表明し、この時は19.94%を得票した。

(*Ibid.* p. 158)

日本語では、文連結接続表現「そして」があるが、フランス語原文には文連結接続表現はない。その代わり *quatre-vingt-deux jours avant le premier tour* (第1回投票の82日前)を先行詞とする関係代名詞 *où* (...の時に)が2つの節を結びつける役割を果たしている。このような場合、われわれは *où* は「そして」に対応する表現だとし、「フランス語と日本語の両方で生起」に分類する。

日本語訳における同定作業はより複雑になる。日本語の接続表現の中には、係り結びを持つものがあるからである。つまり文頭の接続表現と、文末の対応する表現が義務的に関連を持ち、一緒になって論理的関係を表現することがある。例えば、(11)の第2文を訳するには、(12a)と(12b)と(12c)の3つの可能性がある。(12a)は、接続表現「なぜなら」と文末表現「から」の係り結びの例である。(12b)が示すように、この文末表現「から」は単独で現れ、それだけで因果関係を表現することができる。(12c)は接続表現なしの例である。この3例とは異なり、例(12d)は適切な係り結びがなく非文法的である。

(11) フランス語原文

Malheureusement, même le strict respect des objectifs de la directive ne suffirait pas à diminuer les émissions de GES au niveau fixé par la Commission dans son programme européen sur le changement climatique (PECC), lancé en mars 2000. Car, si l'industrie, engagée dans des programmes de réduction de sa consommation d'énergie depuis le premier choc pétrolier, émet de moins en moins de GES, ce n'est pas le cas de la construction immobilière — bureaux et logements — et surtout des transports.

(*Le Monde*, 2003 年 9 月 2 日(火); 資料 c, p. 100)

(12) 日本語訳

残念ながら、たとえ排出枠取引指令の諸目標が厳密に遵守されたとしても、2000 年 3 月に公表された「気候変動に関する欧州計画」(PECC)において欧州委員会が定めた水準まで温室効果ガスの排出量を減少させるには充分であるまい。

- a. なぜならば、確かに第 1 次オイルショック以降、エネルギー消費量の削減計画に乗り出した製造業は温室効果ガスの排出量を徐々に減らしているが、不動産建設—オフィスや住宅—や、特に運輸業についてはそうではないからだ。
- b. [ø]確かに第 1 次オイルショック以降、エネルギー消費量の削減計画に乗り出した製造業は温室効果ガスの排出量を徐々に減らしているが、不動産建設—オフィスや住宅—や、特に運輸業についてはそうではないからだ。

(*Ibid.* p. 107)

- c. [ø]確かに第 1 次オイルショック以降、エネルギー消費量の削減計画に乗り出した製造業は温室効果ガスの排出量を徐々に減らしているが、不動産建設—オフィスや住宅—や、特に運輸業についてはそうではない。
- d. *なぜならば、確かに第 1 次オイルショック以降、エネルギー消費量の削減計画に乗り出した製造業は温室効果ガスの排出量を徐々に減らしているが、不動産建設—オフィスや住宅—や、特に運輸業についてはそうではない。

(12a)のように接続表現と呼応する文末表現がある場合、および(12b)のように文末表現だけの場合が、われわれの分析では、日本語とフランス

語の間に対応する表現ありとなる。これに対し、(12c)は対応する表現がない。いかなるマーカーも2つ文を結びつけていないからである。

最後に、フランス語の読点(;と:)は、接続表現に対応する表現として扱わないものとする。

(13) a. フランス語原文

Mais sa valeur et sa force doivent être appréciées a contrario : [ø] sans le traité, la prolifération « sauvage » se serait à coup sûr développée davantage, rendant le monde infiniment moins sûr qu'il ne l'est aujourd'hui.

(*Le Monde*, 1995年5月13日(土); 資料b, p. 224)

b. 日本語訳

しかし、その価値と効力は、逆の考えをしてみると評価されるべきものである。即ち、NPTがなかったら、“野放し”の核拡散がもっと広がっていたのは、間違いなく、世界の安全は今よりももっと遙かに不確かなものになっていたと思われるからだ。

(*Ibid.* p. 224)

(13b)の日本語訳には、2つの文連結接続表現「しかし」と「即ち」があるが、われわれの処理はこの2つで異なる。「しかし」はフランス語原文(13a)の最初の語である文連結接続表現 *Mais* に対応する。この場合は、「フランス語と日本語の両方で生起」に分類される。これに対して「即ち」は、原文では理由説明に使われる読点 : にしか対応させられない。読点はわれわれの分析からは排除されるため、この「即ち」の場合は、「日本語でだけ生起」に分類される。

5. 分析結果

以上の基準に基づいた分析結果を表1と表2に示す。

まず、直訳調で訳す場合の一般的な傾向に関して以下の仮説を立てる。

- 1) 原文に言語的に明示されている表現は、訳でも対応物を明示して訳す。
- 2) 原文に言語的に明示されていない表現を、訳文を整えるために入れることがある。
- 3) 原文に言語的に明示されている表現を、訳で明示しない

ことは積極的な理由がないかぎり起こりにくい。以上は一般に翻訳が原文よりも長くなりがち傾向と一致する。これらの仮説を受け入れるならば、翻訳テキスト中で、たとえ原文にはみられない文連結接続表現が多くても、そのこと自体は翻訳につきまとう問題であり当然と考える。2つの言語における文連結接続表現の重要性を比べようとするならば、問題とすべきは対応する表現のない文連結接続表現の出現の頻度が、日本語訳とフランス語訳で違うかである。

表1 接続表現の生起数：日本語原文のフランス語訳

	(i) フランス語と日本語の両方で生起	(ii) フランス語でだけ生起	(iii) 日本語でだけ生起	(ii) の占める割合
資料 A	57	27	4	87 %
資料 B	40	25	4	86 %
資料 C	28	15	13	54 %
資料 D1 ⁵	8	6	0	100 %
資料 D2	8	5	1	83 %
資料 E1	6	5	0	100 %
資料 E2	6	3	0	100 %
合計比 86: 22				資料別平均 87 %

表2 接続表現の生起数：フランス語原文の日本語訳

	(i) フランス語と日本語の両方で生起	(ii) フランス語でだけ生起	(iii) 日本語でだけ生起	(ii) の占める割合
資料 a	128	5	2	29 %
資料 b	111	13	28	68 %
資料 c	67	1	8	89 %
資料 d	37	3	3	50 %
合計比 22 : 41				資料別平均 59 %

⁵ 資料Dと資料Eは、1つの日本語原文に対しそれぞれ2種類のフランス語訳を掲載している。直訳に近い訳(資料D1)と自由な訳(資料 D2)、および日本人による訳(資料E1)とフランス人による訳(資料E2)である。

日本語原文のフランス語訳(表1)では、フランス語原文の日本語訳(表2)よりも、対応する表現のない文連結接続表現をより高い頻度で挿入している。資料別の割合を平均すると87%対59%である。総ての生起数合計の比を見ると、日本語原文のフランス語訳の場合は、86:22でありフランス語でだけ生起しているものは、日本語だけの4倍程度もある。これに対し、フランス語原文の日本語訳の場合は、22:41であるから、日本語でだけ生起しているものは、フランス語だけの約2倍程度に止まる。つまり、日本語からフランス語に訳す時のほうが、逆方向の翻訳よりも、原文にない文連結接続表現をより多く挿入しないと、自然な訳文ができないということである。これだけの差があるということは、単に「翻訳では接続表現を加えて、原文よりも論理関係を明確にする傾向がある」ということを示すに止まらず、「文連結接続表現が日本語よりもフランス語で多用される」という一般的傾向を示しているといえるだろう。別の言い方をすると、日本語では、文と文が接続表現なしに並置されることがより多いということである。

6. 明示されない論理的関係

ゼロ接続状態に置かれた文と文との間の関係は、フランス語と日本語では異なるのであろうか。以下の表は、原文もしくは翻訳にのみ現れた接続表現のリストである。

表3は原文が日本語である資料の結果を示す。

表3 対応する表現のない接続表現とその生起数
日本語原文のフランス語訳

フランス語でだけ生起		日本語でだけ生起	
à la suite de quoi	1	だが	2
ainsi	4	また	4
alors	2	まず	2
au contraire	1	さらに	2
au premier abord	2	さて	2
aussi	3	しかし	2
c'est ainsi que	2	そのため	1
d'abord	1	そして	3
d'ailleurs	2	ところが	2
d'autre part	2	つまり	2
d'un autre côté	2		
d'un côté... d'un autre côté	1		
d'une part... d'autre part	1		
dans ces conditions	1		
donc	7		
en effet	12		
en fait	3		
en général	1		
en outre	1		
enfin	14		
et	7		
finalelement	1		
mais	5		
mais en revanche	1		
or	2		
par ailleurs	1		
pour aller contre cela	1		
puis	4		
résultat	1		
生起数合計	86	生起数合計	22

表4は原文がフランス語である資料の結果を示す。

表4 対応する表現のない接続表現とその生起数
フランス語原文の日本語訳

フランス語でだけ生起		日本語でだけ生起	
ainsi	1	だが	5
aussi	1	こうして	1
car	3	また	7
de même	1	まず	1
donc	1	さらに	1
en effet	2	しかも	2
et	7	しかし	14
mais	4	それでも	1
or	1	それに	1
puis	1	そして	5
		すなわち	2
		ただし	1
生起数合計	22	生起数合計	41

ゼロ接続という形で、暗黙の状態におかれた2文の間の論理関係を明らかにするため、対応する表現のない文連結接続表現の意味を調べる。この目的のために、Halliday & Hasan (1976)の以下の分類を採用して、すべての文連結接続表現を分けてみる。

- ・ 付加的
- ・ 反意的
- ・ 因果的
- ・ 時間的

もちろん1つ接続詞にはさまざまな用法がある。しかし本研究ではこの分類に従って、1つの接続詞は最も中心となる意味によって上記4つのどれか1つに分類する。このように、個別の用法の違いや接続詞ごとの個別のニュアンスの違いはあえて捨象して、上記4つのカテゴリーへの帰属数を数えることによってこそ、接続詞の分布に関する大きな傾向を

見ることが可能であると考える。

表3, 表4に現れたすべての文連結接続表現を, 日本語とフランス語に分けた結果を, 表5, 表6で示す。また図1は, 2言語間の違いをグラフ化したものである。

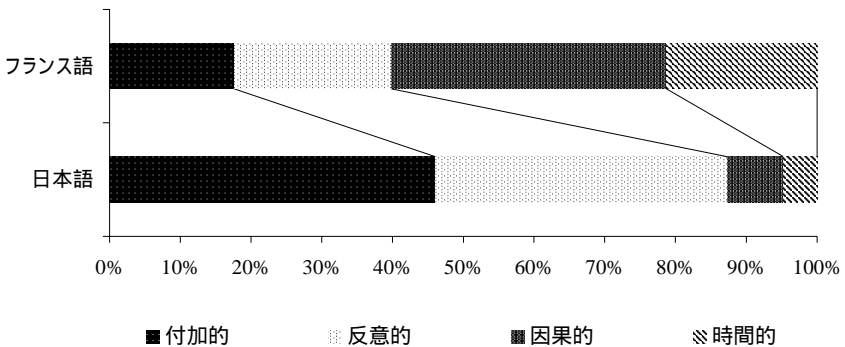
表5 対応する表現のないフランス語の文連結接続表現の分類

分 類	現れた接続詞と生起数	生起数合計
付 加 的	d'ailleurs 2 de même 1 en outre 1 et 14 par ailleurs 1	19 (18%)
反 意 的	au contraire 1 d'autre part 2 d'un autre côté 2 d'un côté... d'un autre côté 1 d'une part... d'autre part 1 en fait 3 mais 9 mais en revanche 1 or 3 pour aller contre cela 1	24 (22%)
因 果 的	ainsi 5 alors 2 à la suite de quoi 1 aussi 4 c'est ainsi que 2 car 3 dans ces conditions 1 donc 8 en effet 14 en général 1 résultat 1	42 (39%)
時 間 的	au premier abord 2 d'abord 1 enfin 14 finalement 1 puis 5	23 (21%)

表6 対応する表現のない日本語の文連結接続表現の分類

分類	現れた接続詞と生起数	生起数合計
付加的	また 11 さらに 3 さて 2 しかも 2 それに 1 そして 8 すなわち 2	29 (46%)
反意的	だが 7 しかし 16 それでも 1 ところが 2	26 (41%)
因果的	こうして 1 このため 1 ただし 1 つまり 2	5 (8%)
時間的	まず 3	3 (4%)

図1 対応する表現のない文連結接続表現の相違



これらの結果は、2言語の間で言語で明示されない論理関係は、かなり異なるということを示している。フランス語では、因果関係の接続表現がもっとも多い(39%)が、日本語では8%にすぎない。さらに、時間関係はフランス語(21%)のほうが日本語(4%)よりもはるかに高い頻度で現れている。日本語で高い頻度を示すのは、「付加的」(46%)と「反意的」(41%)の2つである。他方フランス語では、それほど頻度が高くなく、それぞれ18%と22%である。つまり、日本語では因果関係や時間関係を明示しない傾向にあり⁶、フランス語でゼロ接続で表現される傾向にあるのは、付加的と反意的関係である⁷。

Wilson & Sperber (1993)は、「われわれの日常の認知の大部分は、原因と結果の関係によって占められている」(*Ibid.* p.21)ため、一般にわれわれはゼロ接続の場合に、(特に障害がなければ)他の関係よりも因果関係を読み取る傾向にあると述べている⁸。このWilson & Sperberの主張は、(少なくとも部分的に)本稿の日本語の結果を説明する。日本語では明示されない関係は多くの場合、因果関係である(39%)。そして因果関係は、解釈において他の関係よりも優先権を持つ。このデフォルト規則の適用によって、日本語のテキストではゼロ接続が多くても、論理的理解に困難が生じないのである。

⁶ 因果関係に関するこの結果は、日本人学生とフランス人学生の作文を比較し、日本人はフランス人よりも説明の接続表現を使う頻度が低いとするUshiyama (2006 : 349)の分析と一致する。また時間関係に関するこの結果は、日本語小説のフランス語訳を調べた中山(1984)の観察と一致する。中山によると、日本語原文には存在しないのに、翻訳者によってフランス語訳で付け加えられた表現は、とりわけ時間の順序を明示する状況補語である。

⁷ Burtoff (1983)と入部(1998)は日本人学生の作文において同様の結果述べている。Burtoffによると、因果関係を表す文脈で、日本人はしばしば基本的に反意的意味を持つ接続表現を用いている。入部は、日本人の書く英語の作文ではbutを、日本語の作文では「でも」や「しかし」を多用する傾向を観察している。

⁸ Charolles (1994 : 145)も実験結果に基づく同様の傾向を指摘している。Kerbrat-Orecchioni (1986 : 175)も、この原則について触れている。

7. 追加の論拠

本稿を終える前に、われわれの量的分析結果を裏付ける、別の論拠を追加しておく。Wilson & Sperber (1993 : 13) は、ゼロ接続に関する興味ある対比を示す例として、(14)と(15)を挙げている。

- (14) a. Le verre s'est cassé. Jean l'a laissé tomber.
 'グラスが割れた。ジャンがそれを落とした。'
 b. J'ai frappé Bill. Il m'a insulté.
 '私はビルを殴った。彼は私を侮辱した。'
 c. Je me suis fait prendre. Mon meilleur ami m'a trahi.
 '私はだまされた。親友が私を裏切った。'

(14)の例の最も自然な解釈は、まず事実を述べ、それからその説明をしているというものである。(14a)では、グラスが割れたのは、ジャンがそれを落とした後であり、またジャンがそれを落としたことが原因である。(14b)では、ビルの侮辱が私の暴力を誘発した。(14c)では、親友の裏切りは、私がだまされた内容を説明している。ところが、(これらの解釈ほど自然ではないが、)別の解釈もやはり可能である。(14a)では、ジャンはすでに割れたグラスを落とした。(14b)では、ビルの侮辱は私の暴力の原因ではなく、結果である。(14c)は、「泣きっ面に蜂」の例である。つまり(14)の例では、時間と因果の順序が両方向に解釈されうるのであり、多くの場合は、これらの2文の出現順序とは逆の方向での解釈の方が自然である。ところが、(14)の例の2文の間に接続表現 *Et* (そして) を入れると逆方向の因果関係の解釈が不可能になる。

- (15)⁹ a. Le verre s'est cassé. Et Jean l'a laissé tomber.
 'グラスが割れた。そしてジャンがそれを落とした。'
 b. J'ai frappé Bill. Et il m'a insulté.
 '私はビルを殴った。そして彼は私を侮辱した。'
 c. Je me suis fait prendre. Et mon meilleur ami m'a trahi.
 '私はだまされた。そして親友が私を裏切った。'

⁹ Wilson & Sperber (1993) が示した例は、正確には(15)と同じではなく、*et* は小文字で始まり、各例は全体で1文である。われわれの定義では、これらの例の *et* は文連結接続表現にはならない。しかしここで問題となっている解釈に関しては、(15)は同じとして扱って差し支えない。

われわれの考えでは、この(14)と(15)の違いは、フランス語のテキストにおける接続表現の重要性を示す。接続表現が挿入されるだけで、テキストの解釈が決定的に変わるからである。

ところがフランス語と違って、日本語のゼロ接続は曖昧ではない。(14)に対応する(16)も、(15)に対応する(17)も逆方向の因果関係の解釈は不可能である¹⁰。

- (16) a. グラスが割れた。ジャンがそれを落とした。
 b. 私はビルを殴った。彼は私を侮辱した。
 c. 私はだまされた。親友が私を裏切った。
- (17) a. グラスが割れた。そしてジャンがそれを落とした。
 b. 私はビルを殴った。そして彼は私を侮辱した。
 c. 私はだまされた。そして親友が私を裏切った。

つまり接続表現の付加は、これらの例の解釈を変えない。これは日本語のテキストにおける、接続表現の重要性の低さを示している。ここでは「そして」の例を挙げたが、付加の意味を持つ他の接続表現「それに」や「さらに」でも、結果は同じである。

8. 結論

本稿の分析では、文連結接続表現は、日本語よりもフランス語でより高い頻度であるという傾向を示した。ゼロ接続については、フランス語で多く付加や反意を示すのに使われ、日本語では因果関係と時間関係を示すことが多い。論理的関係の中で、因果関係はデフォルトの解釈であり、日本語のテキストの結束性が低くても、それを補うため、理解に問題が生じにくくなる。

接続表現は、テキストの連続性を保証する結束性の道具であるが、唯

¹⁰ 日本語では、逆方向での因果関係の解釈を持つためには、例えば下記のように第2文の末に説明を表す「のだ」のような表現を付け加えねばならない。

- a. グラスが割れた。ジャンがそれを落としたのだ。
 b. 私はビルを殴った。彼は私を侮辱したのだ。
 c. 私はだまされた。親友が私を裏切ったのだ。

一のものではない。Halliday & Hasan (1976) では、代名詞指示、代用、省略、語彙的繰り返しと並んだ5つの手段の1つとしている。そのため日本語とフランス語のテキストの結束性について一般化するためには、これら他の言語現象も検討する必要がある。だが、Halliday & Hasan も述べているように、接続表現は、結束性を生み出す極めて強力な道具である。それゆえ本稿の結果は、日本語のテキストの相対的な結束性の弱さを示す1つの証拠となる。

もちろん本稿のデータは1つの証拠を提供しただけで、ここでの一般化では抜け落ちてしまう、個々の接続詞のこまかな用法の観察と考察も必要であることは言うまでもない。それは今後の研究にゆだねるとして、ここでは、マクロの視点から見た数字の意味を強調したい。

資料の出典

和文仏訳

資料 A: 滑川明彦・会津洋(1973)『和仏対照 朝日新聞 テーム天声人語』東京:駿河台出版社。(109ページ,8テキスト)

資料 B: 会津洋(1999)『和仏対照 テーム天声人語・春秋(1971-1997)』東京:駿河台出版社。(96ページ,24テキスト)

資料 C: 大賀正喜(1978)『現代仏作文のテクニク』東京:大修館書店。(199ページ,12テキスト)

資料 D1・D2: 数江譲治・H. Billard (1974)『フランス語に訳せば』東京:駿河台出版社。(34ページ,16テキスト)

資料 E1・E2: 大賀正喜・G.メランベルジェ(1987)『和文仏訳のサスペンス』の第1章 東京:白水社。(157ページ,10テキスト)

仏文和訳

資料 a: 小林茂(1984)『新聞のフランス語』東京:白水社。(157ページ,84テキスト)

資料 b: 塚本一(1996)『現代世界をフランス語で読む』東京:白水社。(215ページ,31テキスト)

資料 c: 石井洋二郎 (2005) 『メディアのフランス語入門』 東京 : 白水社. (136ページ, 8テキスト)

資料 d: 久松健一・P. Mangematin (編著) C. Leblanc (著) (2001) 『フランス語立体読解術』 東京 : 駿河台出版社. (160ページ, 40テキスト)

参考文献

Bar-Lev, Zeb & Arthur Palacas (1980) Semantic Command over Pragmatic Priority. *Lingua* 51: 137-146.

Brown, Gillian & George Yule (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge and New York : Cambridge University Press.

Burtoff, Michele J. (1983) *The Logical Organization of Written Expository Discourse in English: a Comparative Study of Japanese, Arabic, and Native Speaker Strategies*. Ph. D. dissertation, Georgetown University.

Carston, Robyn (1993) Conjunction, Explanation and Relevance. *Lingua* 90: 27-48.

Charolles, Michel (1994) Cohésion, cohérence et pertinence du discours. *Travaux de linguistique* 29 : 125-151.

Clark, Herbert H. (1977) Bridging. In: Johnson-Laird, Philip Nicholas & Peter Cathcart Wason (eds.) *Thinking: readings in cognitive science*, 411-420. Cambridge: Cambridge University Press.

Halliday, M. A. K. & Ruqaiya Hasan (1976) *Cohesion in English*. London and New York, Longman.

入部明子 (1998) 「国際化時代に通用する論理的な文章の書き方」 『日本語学』 17(2):14-21.

Kerbrat-Orecchioni, Catherine (1986) *L'implicite*. Paris : Armand Colin.

Lascardes, Alex & Jon Oberlander (1993) Temporal coherence and defeasible knowledge. *Theoretical Linguistics* 19(1): 1-37.

中山真彦(1984) 「救済としての文学 - 『雪国』とその仏訳について」 『現

代文学』29: 32-64.

Payne, John R. (1985) Complex Phrases and Complex Sentences. In : Shopen, Timothy (ed.) *Language Typology and Syntactic Description 2: Complex Constructions*, 3-41. Cambridge and New York: Cambridge University Press.

Takagaki, Yumi (2008) *Les plans d'organisation textuelle en français et en japonais : de la rhétorique contrastive à la linguistique textuelle*, thèse de doctorat, Rouen, université de Rouen.

Ushiyama, Kazuko (2006) *Étude contrastive de modes d'organisation textuelle et discursive chez des étudiants français et japonais*. thèse de doctorat, Université Stendhal Grenoble III.

Vinay, Jean-Paul & Jean Darbelnet (1977) *Stylistique comparée du français et de l'anglais*. Québec : Beauchemin.

Wilson, Deirdre & Dan Sperber (1993) Pragmatique et temps. *Langages* 112 : 8-25.

(大阪府立大学准教授)